

よわむし太郎

昔、ある村によわむし太郎とよばれる男がいました。

せはとても高く、力も人一倍あるのに、子どもたちからどんなにばかにされても、ひどいいたずらをされても、にこにこ笑っていました。

子どもたちは、それをよいことに、

「よわむし太郎。こっちへ来い。よわむし太郎。」

と、いたずらをするのです。

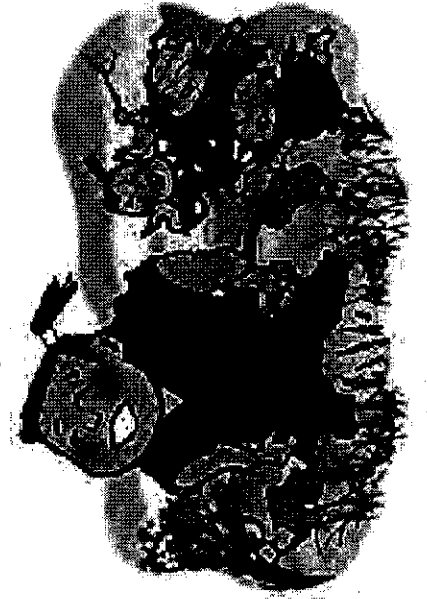
ある子どもは、太郎が気付かぬうちに、馬のわらじを太郎のこしにしばり付けて、はやし立てました。

また、別の子どもは、木の上から、下を通る太郎目がけて真ッ赤にじゅうしたかきの実をぶつけ、顔や着物をとろとろによこしてしまいました。

それでも太郎は、

「子どものことだもの、仕方ねえぞ。」

と言って、にこにこ笑っていました。



太郎は、森の小屋に一人で住んでいました。

その森には、大きな池があつて、そこに毎年、白い大きな鳥が飛んできていました。

村の子どもたちは、その白い大きな鳥には決して悪さをしませんでした。

そればかりか、その白い大きな鳥を大切にしていました。

「今日は、十二羽もいるぞ。」

「おれのやったえさを食べたぞ。」

子どもたちにとって、この白い大きな鳥は仲の良い友達でありました。

子ども好きの太郎は、もちろんこの池に来ては、せつせとえさをやって世話をしておりました。

この国のとの様は、たいそう強く、その上、かりが大好きでありました。

いつもの様は、家来を連れて野原や山をかけ回り、しかやうさぎ、いのししなどを仕とめておりました。

あるときとの様は、太郎のいる村の近くでかりをしました。

山の中を一日中走り回りましたが、この日にかぎって一ぴきのえものもつかまりませんでした。

「ええい。何でもよい。何かつかまえられないか。」

との様はたいそうはらを立てて、大声でとなり始めました。



でも、うさぎ一ぴきあらわれませんでした。

すっかりおこったとの様は、子どもたちの遊んでいる森の中の池の方まで進んでいきました。

「おお。あそこに白い大きな鳥がいるぞ。これはよい、あれを今日のみやげにしよう。」

との様は、弓をかまえるとねらいを定めました。

その時、

「だめだ。だめだ。あの鳥をうってはだめだ。」

大きな手をいっぱいに広げて、との様の前に立ちはだかった者がおりました。太郎です。

「こらっ、だれだっ。わしのじゃまをするやつは。」

おどろいた家来たちが太郎をどけようとしたが、反対に太郎にやられてしまいました。

「どけっ。じゃまをすると、おまえも鳥といっしょに仕とめてしまうぞ。」

との様は大声を出しましたが、太郎は動きませんでした。

「だめでございます。あの鳥は、この辺りの子どもたちが、毎日えさをやって世話をしているのでございませう。子どもたちが悲しみます。どうか、助けてやってください。」

太郎は両手を広げたまま、目から大きななみだをこぼして、との様にたのみました。

じっと太郎をにらんでいたとの様は、しばらくすると、ゆっくりと弓を下に向けました。

「おまえが子どもたちを思う気持ちと、その勇氣にめんじて、この鳥をとらないことにしよう。」

との様は、馬にまたがると、しろに向かって帰っていきました。

どうなることかと心配していた子どもたちは、わっと、太郎の周りに走りよりました。

池にいるあの白い大きな鳥だけは、何事もなかったように、ゆうゆうと泳いでいました。

それから後は、「よわむし太郎」という名前は、この村から消えてしまいました。



「わたしたちの道徳 小学校三・四年」
(文部科学省)